



ふかほりよしとし
深堀好敏部会長(79)は16歳で被爆、戦後は聖フランシスコ病院勤務の傍ら、故秋月辰一郎氏らの爆心地復元運動にも加わった。現部会の前身である「長崎の被爆写真調査会」には1979(昭和54)年の設立から参加、故林重男、松本栄一氏ら写真家との交流を通じ、被爆写真の収集・検証に努めた。

託された写真、引き継ぐ使命

部会発足30周年

初期の「長崎の被爆写真調査会」による写真展(長崎市民会館)。松本栄一氏寄託写真、岩倉務氏が米国から入手した写真等を展示した(1979年頃)写真左より→高橋、相物屋、荒木(正)、荒木(三)、山本、池田



雑感

深堀好敏

原爆写真の収集を始めて、この八月で三十年になる。一九七九年夏、長崎原爆を記録した写真の探索を目的に発足したボランティア活動は、当初私を含め六人の男性が参加した。そのグループは「長崎の被爆写真調査会」と名付けられた。その後、「子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会」(いわゆる10フィート運動の代表幹事、岩倉務氏が東京から来崎し、携えた原爆写真の検証を依頼された。これがグループにとつての初仕事となった。

被爆者有志により始まったこの活動は、やがてヒロシマ・ナガサキを撮影した在京の写真家に知れ、調査依頼は徐々に拡がりを見せた。中でも調査済の写真を返却の際「皆さんの献身的努力には頭が下がります。このプリントは東京より、皆さんの手元で保管して役立てて下さい」と、ワシントンの米

国立公文書館から持ち帰った六〇〇枚の写真を譲り受けた時は、一同思わず歓声を上げ、その後の活動に弾みがついた。

八三年長崎平和推進協会発足を機に、グループ全員が収集した写真と共に合流した。その平和推進協会も翌八四年財団法人となり、今年二十五周年を迎えようとしている。四部会の一つ「写真資料調査部会」には現在八名が登録している。うち三名が高齢と病気を理由に休養、残り五名が毎週例会を開き、写真の収集・検証・情報交換・整理作業を行っている。

従来アメリカに眠る原爆写真の入手は非常に困難だった。国立公文書館の他にも、米空軍視聴覚資料センター、米海軍写真センター、米陸軍視聴覚センターなどに数千枚の写真が保管されていると言われる。また進駐軍将兵が撮り、本国に持ち帰った写真も、各家庭のアルバムに眠っていると推察される。今回のバ

ラク・オバマ新大統領の就任演説の、「核の脅威を削減し…」に希望的観測を抱くのは時期尚早だが、アメリカにも少しずつ変革の兆しを感じている。

二十世紀に起きた原爆被災の実相を、後世に伝える唯一の手段として原爆写真が果たす役割は重要度を増している。今こそ国や地方自治体は、歴史的資料として原爆写真の発掘・保存に、より努力を傾注すべきではないか。三十年前原爆写真の収集に立ち上がった被爆者グループ六人のうち、これまでに五人が他界した。一人残された私も高齢化を気にしつつ、若い人の参加を心待ちにする日々だ。



1997(平成9)年。左より→尾畑、織方、荒木、深堀、堺屋、吉山、内野

「写真資料調査部会三十周年」関連記事再録

「調査会が発足」

「深堀は二つ返事で応じた。病院事務の傍ら、修学旅行生らに被爆体験を語り聞かせていた深堀も、かねて同じことを考えていたからだ。四年後に写真資料調査部会に衣替えする市民グループ「長崎の被爆写真調査会」が発足だった。

間もなく、東京から一人の男が訪ねてきた。戦争記録を収集する市民運動の中心的存在だった岩倉務(故人)。米国立公文書館から入手した写真を抱えていた。原爆被害やその威力調査を任務とした米国防略爆撃調査団が原爆投下直後の四五年十月から十一月にかけて、焼け野原となった長崎を撮影したという約六百枚。岩倉はその分析を依頼してきた。米側が原爆の「成果」を冷徹、克明にとらえた写真に深堀は衝撃を受け、資料として残すための検証の重みを感じたという。

部会の作業室は長崎原爆資料館の一角にある。これまで調査、分析してきた写真は同調査団のほか、民間人や被爆直後に長崎に入った旧日本軍報道班員、新聞社カメラマンが撮影したものが多い。米軍が接収し、日本に返還された写真も含まれる。検証は現地調査で場所の見当を付け、作業室で爆心地を中心とした地図に特製の三角定規を当てて方位や距離を測定。最終的に数人があらためて現地足を運ぶ、複数の目で確認する地味な作業だ。初めはこつがつかめず、徒労に終わった日も少なくない。

外国人墓地と思われる写真に写った倒れた墓石の特定に何年も要したこともある。」
 長崎新聞二〇〇九年一月一日掲載『被爆写真検証30年』より



“風化する記憶を写真に追う”

「写真資料調査部会」発足三十周年に際し、年頭から西日本、長崎の二紙に関連記事が掲載された。
 西日本新聞では「レンズの記憶」と題した連載が開始され、深堀部会長に関する内容は一月十日の初回から、四回にわたり掲載された。連載の今後にも注目したい。長崎新聞には元旦に「被爆者写真検証30年」と題して掲載、三月からは新たに被爆写真に関する連載が始まる予定で、そちらの内容も期待される。



「八月十日午前、深堀さんは写真の一番左に見える病院本館内にいた。実家は病院そばの山里町。勤労働員中で直撃を免れた九日も何とか帰ろうとしたが、道中で爆心地方面から避難してくる大人たちに強く止められ、断念していた。翌日、ようやく近所の友人とともに帰り着いた。帯は破壊しつくされ、下宿先ではおじと姉が犠牲になっていた。「けが人は、みんな大学病院に行くと」と聞かされ、友人の祖母を捜しに病院へ向かったものの、医師も看護師もいない。一階も階段も二階も、数え切れないほどのけが人が座り込み、横になっているだけだった。

「丸フ」の坊やじゃなかね」。あちこちから自分を呼ぶ聞き慣れた声があった。実家の米屋のはんてんには、丸に「深堀」の「フ」の字が書かれていた。「水をくれ」と次々に頼まれて断れず、割れた炭酸飲料の瓶にちよつとだけすくつて、数滴ずつ分けた。近くの小川を二回往復したが、きりがない。病院を出て、友人の祖母の捜索を再開した。」

西日本新聞二〇〇九年一月十日掲載「レンズの記憶」より

ピカドンをまともに浴びた 唐僧木庵の碑いしづみ

丸田和男



「唐僧木庵の碑」

長崎市街の中央に位置する金比羅山、標高三六六メートルのこの山が、原爆時自然の障りになったお陰で、全市壊滅という最悪の惨禍だけは避け

られた。

その頂上に唐僧木庵（一六一一〜一六八四）の筆になる「無凡山」と刻まれた大岩の石碑が立っている。

明暦元年（一六五五）渡来、隠元、即非と並んで黄檗三筆の一人といわれた木庵は、万治元年（一六六〇）のある日、金比羅山に登つて、その絶景に感動して無凡山と命名、山頂の大岩に木庵書の「無凡山」の文字が刻まれた。

一九四五年八月九日、浦上の上空五百メートルで炸裂した原爆に、何一つ遮るものがない金比羅山頂で、爆風、熱線、放射線をまともに受けるという憂き目にあつたこのいしづみは、今もなお物言わぬ証人として金比羅山頂から長崎の街を静かに見守っている。

読書のお勧め

室園久信

『原爆前後』と題された黄色い表紙の小冊子が、原爆資料館図書室の書棚、一番手前の上段に多数並んでいます。

この文集は、広島を含む三菱関連の各工場（造船「兵器」製鋼所「電機製作所」及び「川南造船所」に勤務中被爆され、犠牲となられた方々（学徒報国隊・挺身隊、徴用工・所員の、事務所勤務と家族を含む）の御霊前に捧げた本です。

長崎市内各地域での原爆被災の状況を始め、敗戦直前の三菱関連工場に於いて、連日の空襲に必死の防戦対応にと考案された新製品（ロケット、飛行機、特攻艦艇や機器等）開発の状況も紹介しています。また戦前・戦中・戦後の工場状況や秘話、各人の家庭生活、兵役、シベリア抑留体験等、話題豊富な小冊子群です。皆様方のご一読をお勧めします。



※原爆前後 昭和四十年代に出版された三菱関係者の原爆・戦争体験記（全六十一巻）

次の世代のため……

堀田武弘

記念すべき被爆六十周年を迎えた平成十七年、写真資料調査部会では「ナガサキ原爆写真展」を長崎市民会館で開催した。写真展終了後、今後の部会の方向性が話し合われた。この頃、部会員の平均年齢は八十歳に近く、マスコミは後継者不足と大々的に報じていた。また深堀好敏部会長、堺屋修一副部会長のお二人は長崎市から委嘱された、長崎原爆資料館所蔵写真のキャプション作成を終えた直後でもあつた。

この為先輩会員の一部分から「写真資料調査部会は一応役割を終えた。これから解散してはどうか」という意見が出された。この時私は「自分は幼少時の被爆であり、当時の記憶は断片的でしかない。だからこそ私たち次の世代の為に、この

部会を是非存続して欲しい」と訴えた。現在所蔵されている写真が原爆写真の全てではなく、今後発見される写真もあるだろう。その際検証機関としての部会の存在は、何と言つても大きい。幸い先輩会員のご理解で、部会は存続することとなった。今後も原爆写真を通じ、常に被爆体験の継承に尽力したいと思つている。



あの日を訪ねて

松田 斉

いわゆる被爆写真と言われるものの検証作業で、最も重要なのは言うまでもなく撮影場所の特定である。撮影者自身によって撮影時期や場所が記録された例は稀であり、深堀部会長を始め諸先輩方が長年腐心され

できたこともある。

撮影者の大半は東京や県外からの報道機関や学者、或いは米軍であった。彼らは本来長崎の地理や地名に疎く、米軍においては尚更である。加えて戦後の都市計画による市街地の変貌、六十年を越す歳月による記憶の風化は作業を一層困難にしている。

その中で唯一変化の少ないのは山容であり、これまで浦上地区の背後には特徴のある山並みを常に見ることができた。しかし近年は重機の発達によって、山容そのものが変化する大規模な開発が始まった場所もある。また乱立する高層ビル群は人間の視野から山を奪ってしまった。

従って地図上である程度見当をつけて現地を訪れても、当時の写真との照合は全く不可能というケースも増えている。また、航空機から撮影された写真は、その場所を訪ねて検証することは容易ではない。一方で最近のパソコンソフトの発達で、“グーグルアース”を始め

優秀な3D地図ソフトも現れた。これらの活用は、山容や航空機からの視野の確認には有効な手段である。しかしこれらを駆使してもなお、多くの写真は撮影場所の特定が容易ではない。これまで蒐集、保管されている膨大な写真の量、また今後の新たな発見を考える時、それらは気の遠くなるような作業である。しかし原爆という人類未曾有の災害を記録した貴重な写真は、最後の一枚までそれらのデータが検証、記録されるべきであろう。そしてそれらが広く公開されることにより、二度と再びこのような写真が撮影される日の来ない世界になることを、多くの人々が念じる機会になることを期待したい。被爆写真の検証は、いわば七万を越える長崎の犠牲者の墓碑銘を刻むにも似た行為であり、今後とも志ある人々によって継続されていかねばならないと信じている。



被爆写真活用のお薦め

これまでの写真展開催を通して感じることは、被爆写真は原爆への関心や個々の記憶・体験を呼び起こす力を秘めているという事だ。「写真資料調査部会」の名称からは固苦しい組織を連想するが、部会は毎週月曜日(祭日は除く)、気軽な雰囲気の中で開催されている。時期や規模にかかわらず、被爆写真の活用を企画される方は、是非ご一報をお願いしたい。



今月の一枚

岡町付近から北方を望む



大橋の橋塔(長崎原爆資料館)



岡町付近の県道(当時)上から、北の住吉方面を望んだ光景である。中央にある大橋の四つの橋塔のうち、手前左側の橋塔が失われているのが確認できる。浦上川に崩落したこの橋塔は戦後も長らく河床にあったが、昭和40年代に引き上げられ爆心地公園に展示された。その後1996年の原爆資料館開館に際して展示室に移設され、爆風の威力を今に伝えている。(米軍撮影)